岡豪風土

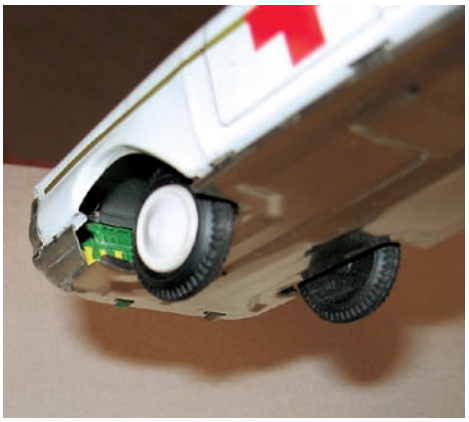
〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第62号 2007年12月1日

ブリキのおもちゃ

当館 学芸課長 岡本 桂典

ブリキとは、薄鉄板をスズでメッキした鋼板のことである。語源は、オランダ語のブリク（blik）といわれ、ブリクは葉鉄と訳され、薄い板を意味している。日本金属玩具史編纂委員会『日本金属玩具史』（昭和三五年・一九六〇）によると、幕末には、外見の様相から光り板と呼称された。明治時代になると英国から輸入されるようになり、薄板とも呼ばれるようになった。また、英語のtinplateをそのまま発音どおり用いてチンプレートとも呼んだ。その後、中国風に鉄葉と書きブリキと呼ばれるようになったとされている。ブリキは毒性の少ないことから缶詰の缶などの食品用の容器にも用いられた。明治時代の初期にはランプの石油缶を利用してブリキ玩具が造られ始めた。

終戦後は、輸入食料の見返り物資の一つとして、玩具の生産が始まった。玩具類にも、GHQの命令で「メイド・イン・オキュパイド・ジャパン」（Made in Occupied Japan）「占領下の日本製」の英文文字を冠し輸出された。そこには敗戦国の玩具生産の姿があった。昭和二二年（一九四七）の玩具輸出額はセルロイド製品が一位であったが、昭和二四年には陶磁製品と金属製品が首位を占めた（斎藤良輔『昭和玩具文化史』一九七八年による）。



内部に転用のブリキがみえる

ブリキ製の車

また、ブリキのおもちゃは、進駐軍の空き缶を再利用して造られた。写真のブリキの車は、進駐軍の空き缶ではないが、転用されたブリキの痕跡をとどめている。車は一見綺麗な仕上げがなされている。現代の子どもなら手を切ってしまいそうな部分もある。車体はボディ・窓部分と屋根・シートなどの内装、車底の部分、バンパー、タイヤなどのパーツに分かれ造られているようだ。本体は、分解しないとわからないが、屋根の内面には転用前の塗装が若干残っており、他のブリキ製品を用いていることがわかる（写真未掲載）。二枚目の写真は、ボディのライトとバンパー部分の内部写真であるが、内面に緑の塗装がみえている。森永製品のブリキ缶を再利用しているのである。また、車体を止める爪もみえている。たかが「おもちゃ」と笑われるかも知れないが、車体をじっくりみると製作した職人や素材の利用方法など、おもちゃをめぐる歴史の一齣（こま）が垣間みえてくる。

おもちゃも文化遺産の一つである。

企画展

なつかしのおもちゃ ―高橋俊和さんのコレクション―

子ども時代に置き忘れてきたおもちゃたちとの再会

寺川 桂嗣
岡本 典

おもちゃの歴史

おもちゃは主として子どもが手に取り遊ぶ道具であるが、本来は子どもだけに限定されるものではない。近年はレトロ玩具が人気を呼び、大人達の中にも玩具の世界が広がっている。

「おもちゃ」という言葉は、平安時代宮中で用いられていた「もちあそびもの」が語源とされている。室町時代初期には女房詞（宮中で仕える女官が衣食住に関する事物について用いた一種の隠語的なことば）として「おもちあ」が用いられ始めたとされている。「もつ」という言葉に接頭語と接尾語が付き「おもつや」となり、さらに音便化され「おもちゃ」となったと言われている。江戸時代には「てあそび」「もちゃそび」とも呼ばれ手玩・玩物と書かれた。ちなみに玩具（がんぐ）という言葉は、日露戦争（明治三七～三八年・一九〇四～〇五）のころに、明治政府による国語統一運動の中で生まれた新しい言葉である。

成田龍一氏の「子どもと玩具」（『日本歴史館』一九九三年　小学館）によれば、中勘助の『銀の匙』には自分の幼年時代を描いた明治二三年（一八九〇）ころに行われていた、石けり・縄跳び・めかくしおに・羽子板など戸外での遊び、千代紙・にらめっこ・お手玉などの室内遊び、そしてセミ取り・釣りなど自然の中での遊びが多数登場する。玩具は、紙ものが主体でメンコも登場した。紙は大衆的で長もちもするため、玩具の材料とされた。

この玩具の様相に大きな変化をもたらしたのが、ブリキの登場である。ブリキはすでに一八七〇年代にはイギリスから輸入されはじめ、玩具の世界に広がった。一九一〇年頃には、ブリキ板への印刷が可能となり、手のこんだブリキ玩具が登場、一九一〇～二〇年にはブリキの玩具が広まりはじめる。同じ頃にセルロイドの玩具も普及し始め、重要な輸出品ともなった。なお、ゴムまりが一般に普及するのは、一九一〇年ころである。

玩具の素材が紙や木から、ブリキ・セルロイド・ゴムへと種類が増えると玩具の種類も増えていく。玩具は当初、縁日・祭礼の露店や夜店、駄菓子屋で売っていた。一九一〇年代にはおもちゃ屋から玩具を購入するようになったとされている。

おもちゃの素材の多様化やおもちゃ屋の存在が、子ども世界に一つの変化をもたらしたと考えられ、さらに子ども雑誌の創刊は、子ども文化に大きな影響を与えた。

高橋さんの玩具収集

担当学芸員が高橋俊和さん（昭和三一〈一九五六〉年生まれ）が玩具のコレクションをされていることを知ったのは、高橋さんの自宅を初めて訪ねた今から七年前であった。部屋にはかつて一緒に遊んだ玩具が一面に展示されていた。そこは、いつでも子どもの頃にタイムスリップできる空間でもあった。

高橋家の玩具展示室

高橋さんはコレクションをみながら子どもの頃のことを少し語ってくれた。「僕は、楽しいと思ってやったことが悪いことが多かった。所謂、わりこと坊主でした。それでも小学校の時は、休みの日も親身になって僕の話や食事、面倒を見てくれた先生がいてとてもうれしかった。いつも怒られていたけど・・。僕はおもちゃは、あまり購入できなかったけれど、よく駄菓子屋や友達のところへ行って見せてもらっていた。とてもうらやましかった。けれどそれ以上のことは、望みません

コレクションの玩具に囲まれる高橋さん

でした。あの頃は、皆大変やったから…。五円や十円を握りしめて、たまにしか駄菓子屋に行けなかったのだから。そういえば、飴一個五〇銭というのもあった。いろいろあったけど友達はやさしかった。今の時代は?」と、駄菓子屋とおもちゃなどをとおしての教育論にまで話が及ぶ。

高橋さんは今から二〇年ほど前、一点のブリキのおもちゃとの出会いがきっかけとなり、玩具などの収集を始められた。地道に店などを訪ね歩き、人々との出会いを通して眠っていた玩具類を収集した。「今でも、新しいものに出会うとわくわくする」という。大切な事は、このときめきであると。店の脇や奥に忘れられ、ほこりまみれの玩具類に出会った時、「あっ、こんなものも残っていたんだ。やっと出会うことができた」と思った時の喜び。今度はもっと違う物と出会うかもしれない。これが、次の原動力になるという。学芸員はこんな言葉を聞くと共感してしまうのである。失われゆく資料を収集する学芸員の姿と重ね合わせてしまうからである。おもちゃと出会う度、高橋さんの眼の奥には、子どもの頃の風景が走馬燈のように現れるのである。

高橋さんに思い出に残る玩具について尋ねたところ、おもちゃを収集する時におもちゃを通して出会った人とのつながりや、ドラマがあり、色々な思い出が生まれること、おもちゃを介して人と人との触れ合いがあり、それぞれのおもちゃに愛着が生まれすべてが忘れがたいものだという。人と人とのコミュニケーションから生まれてくるぬくもりや温かさが、かけがえのないものであると。おもちゃを通じて十数年来のおつきあいを続けている方もいるという。

高橋さんは、解体された玩具屋跡で、玩具を求めて発掘もしている。解体された時に土中に埋もれたセルロイドのおもちゃや緑色のガラスの石蹴り玉も見つけたという。なんという執念であろうか。まさに、現代考古学である。高橋さん流「おもちゃ考古学」とでも呼ぼうかと思ってしまう。

発掘された人形

高橋さんの収集資料は、膨大な数にのぼる。ブリキの玩具・紙の着せ替え・凧・ビー玉・パン（メンコ）・コマ・縁日のおもちゃ・プラスチック製品の玩具・キャラクター商品、さらにジュースの瓶や飲み物の販売機・菓子類の箱・看板・生活用品に至るまである。

高橋さんの収集に一度だけ同行した事がある。その方法には脱帽した。学芸員は実は収集方法を指導してもらったのである。現代考古学の一つの方法論を見せつけられた気がした。

発掘されたガラスの石蹴り玉

高橋さんの収蔵資料を見ると高価なブリキの玩具もあるが、駄菓子屋などで売られていた資料が意外と多い。そこには高橋さん独特の収集観が見え隠れしている。同じ種類の玩具を多数収集しているものもある。さらに学芸員が注目したのは、個人の所有になる前の店頭や倉庫に積み上げられていたような形跡のある資料が一部残っていることである。未開封の資料群もある。この資料群は、問屋や駄菓子屋などしか知らない収蔵の姿である。これらの資料群は、昭和史の資料でもある。高橋さんは現在、収集から資料保存へと多数の資料を前に格闘している。

ビー玉

駄菓子屋さん探検

高橋さんの駄菓子屋などから収集した資料をほんの少し覗いてみよう。

パン・ビー玉・ベーゴマ

男の子ならだれもが一度は悔しい思いをして遊んだことのあるのが、パン（メンコ）、ビー玉、独楽・ベーゴマ（バイ）の三種類の遊びであろう。男の子の遊びのご三家とも称され、子どもたちに大変人気があったが、パンやビー玉は、勝負事のため大人達から注

意をされたこともあった。一回一回の勝負に一喜一憂し、勝負に勝った日は意気揚々と引き上げ、負けると肩を落として帰り自宅で練習し勝つ方法を編み出すこともあった。パンは普通自分で切り取り、さらにあまり子ども達には入手しづらい通称昔パンと呼ばれた古いパンが人気があり、何とか集めようとした。なお昭和三八年ころ保育園の園児は、焼却炉のゴミ箱にあったタバコの箱などを切り抜きパンの変わりとして使ったこともあった。

紙の着せ替え

女の子の代表的な遊びに「着せ替え」がある。人物やいろいろな衣装が印刷された一枚の色刷りの紙から、人や衣服を切り抜き、衣装の着せ替えを楽しむ遊びである。一枚の紙に刷るので、非常に安価に作ることができ、擬似体験的な面をもつもので、少女達の夢の世界を広げることができた。

着せ替え

ままごとセット

料理や食事のまねごとをする「ままごと」は少女達にとって最もポピュラーな遊びである。ままごとで使うミニチュアの道具類は、木製のものからブリキやセルロイドに材料が変化し、昭和二〇年代後半からプラスチック製が登場。昭和三〇年代以降は電化製品のミニチュアも加わり、昭和四〇年代半ばには、実際に使えるおもちゃ家電が流行。ままごとセットは、各時代の台所の様子を反映している。

ままごとセット

駄菓子屋さんには、玩具とともにお菓子も売られていた。ゼリーや飴、ソースイカなどもあった。男の子に人気があったのが、クジである。一等から三等などの景品を目指して通ったものである。はずれは「スカ」と書かれていた。舌でなめて文字を浮き出さすものもあった。また、巻火薬を入れて鳴らすピストルもあった。これは、西部劇ブームが火付け役となった。また銀玉を入れるピストルも人気があったが、少し価格が高くお正月などに購入したような記憶がある。

高価なブリキの戦車もあったが購入できる家庭は限られていたようだ。電池で動き、エンジン部分が光るものもあった。

ピストル

ブリキのタンク

駄菓子屋に並べられる玩具は季節により変化した。コマや凧、Y字のパチンコ（ブンヤともいった）、テレビに登場するキャラクター商品も人気があった。駄菓子屋は、文具店も兼ねていたこともあった。日光写真というものもあった。

現代は、インターネットでもショッピングのできる時代で、簡単に物が購入できる。そして、二四時間営業のコンビニもある。その一方、現代は人と人、人と物との接点や繋がりが稀薄になってきているともいわれている。高橋さんの玩具収集には、収集だけでなく人と人とのコミュニケーションを大事にする姿がある。それは、子どもたちのためにも必要という。

「おばちゃん。寒いちゃ。（寒いね）」「子どもが何をいうぞね」「火にあたらいてや。（火鉢であたたまらしてください）」「あれ！あの一等のおもちゃは」「ないぞね」「だれが当てたが」「○○○の子やと思うが」〈がっくり〉「ほんならこれにするかえ」「おばちゃんありがとう」「○○○君やろうか。今度みせてもらおうと」

高橋さんの収集玩具を見ていると、こんな子どもの声が聞こえてきそうな気がする。

れきみんトピックス

土佐の暮らしを記録する

地域文化デジタルアーカイブ講座

失われつつある地域文化をデジタル技術で記録するための方法や技術を講義する「地域文化デジタルアーカイブ講座」が、土佐学協会地域文化デジタルアーカイブ研究会と当館の主催で平成一九年九月から一二月にかけて開催されました。

この講座は、昨年、生活創造工房の大野加惠さんの呼び掛けで始められた地域文化デジタルアーカイブ研究会での検討を経て実現したものです。研究会には大野さんをはじめ、前館長の坂本正夫さん、高知県立高知女子大学の橋尾直和さん、県文化推進課や当館館長・副館長、民俗担当が参加し、産・学・官による協同作業になりました。

講座には、八名の方が参加し、大野さんの「デジタルアーカイブ概論」、坂本さんの「民俗学とは何か」を皮切りに、民俗・民具調査やデジタルアーカイブの方法を、六回に分けて学びました。

実地調査は、太刀踊りが有名な土佐市蓮池（はすいけ）の西宮（にしのみや）八幡宮の秋祭りを調査しました。受講生が分担し、祭りの準備、裏側、神事の一部始終まで細かくデジタルカメラと、デジタルビデオカメラで取材しました。

取材結果は参加者がパワーポイントを使った作品にまとめて、一二月一日の発表会で公開し、一一日まで企画コーナーでも展示しました。

県内の生活や民俗を記録し、公開していくことは、未来の高知県のためにも重要なことです。デジタルアーカイブ講座は次年度も開催される予定です。その時は有志のご参加を募集します。

（梅野）

祭りの準備から細かく記録しました

歴民のパティオ(4)

子どもたちの真剣勝負

館長　宅間　一之

高橋俊和さんのコレクションの中に、使われてないままの「パン」があった。私たちは「パン」と言ったが一般には「メンコ（面子）」であろうか。この遊びは、負ければ奪い取られるから子ども達にとっては真剣勝負。そこには必死の術があり工夫があった。絵柄には有名野球選手や「黄金バット」、「鞍馬天狗」もあった。地面や台の上が競技場だ。そこにある相手のパンの横に自分のものを投げつけ、その風圧で相手のものを裏返すか、台が競技場なら台から突き落とせば勝ち、負かしたパンは自分のものになる。相手に裏返されないよう、また簡単に突き落とされまいとする工夫が勝利の鍵である。パンの紙面にカーブをつけるように折り曲げ風圧を強くするのも、ロウを塗って重くするのも工夫の一つ。角を折り曲げ横から突く力の増幅を考える術も、自分の足を相手のパンの横に置いて、投げたパンの風圧を高めるのも勝利への秘訣であった。

テレビゲームや精巧なおもちゃに囲まれる今の子ども達と遊びは違う。道ばたに落ちている棒切れでのチャンバラ、石ころも、空き缶もビンの蓋でも、手作りのおもちゃも含め何でもが遊び道具、そして集団で遊ぶのが常だった。メンバー分けも相手への気配りも子ども達の間でできた。それは知らず知らずのうちに先輩達から学びとった子ども達のルールでもあった。

なつかしいものに再会し、今の子ども世界がちょっぴり気になった。

パン（メンコ）
コレクションの中の使われてないパン

各担当に子ども時の遊びを記録してもらいました。

考古　工夫を重ね、本音を率直に表現して遊んだこと

私の（昭和四二年生まれ）小学校低学年のころの遊びを紹介します。室内ではリカちゃんで遊びました。私はリカちゃんの人形は一体だけ持っていて着せ替えをして遊びました。母親が縫ってくれた他の着替えや布団のセットは持っていたのですが、「リカちゃんハウス」は持っていませんでした。親におねだりしましたが買ってもらえず、ハウスを持っている友達の家へよく遊びに出かけました。

屋外で一番記憶に残っているのは「田んぼ」という遊びです。地域によっては「十字路」「ねこはちどん」といっていたようです。空き地に棒で田の字の線を描き、鬼役が中の十字路を行き来して四つの区画を回っている人を捕まえるというものでした。枠外に二歩だけ出ても可というルールでした。鬼に触られないように背中をくねらしながら思いっきり遠くへジャンプして上手く逃げることのできた時の快感は今でも鮮明に覚えています。反対に誰にもタッチできない時の鬼はみじめな気持ちになったものでした。瞬時の判断と機敏な動きが必要で、スリルあふれる遊びでした。

小学校の中学年の頃、「花いちもんめ」を学校の休み時間にしていました。「誰が欲しい」「あの子が欲しい」というフレーズで誰を選ぶかが子ども同士の中での人気度を表していたように思います。（曽我）

田んぼ

歴史　昔と今が融合する遊びの世界

私は、昭和三八年に生を受け、空前のオリンピック景気に沸く東京の郊外で幼少期を過ごしました。メカ好きだった父は、一人息子の私に自動車や新幹線のおもちゃを買い与えてくれましたが、一番の私のお気に入りはゴーカートでした。

幼稚園では、鬼ごっこ（「海坊主が出るから嫌」という問答があるもの）などの昔遊びが大ヒットしていましたが、家の近所では、「カンけり」「石ふみ」「陣とり」などが主流でした。小学生になると空き地での草野球が中心となり、お腹がすけば近所の駄菓子屋へ直行。一個五円から一〇円の駄菓子をほおばりながら、次の遊びを考えるといった調子でした。少人数で遊ぶ時は、「ライダーカード」などを持ち寄ってコレクション自慢や交換会をしたものです。場所は歩道橋や堤防、神社の屋根の上と決まっていました。理由は、交換が終わったあと「仮面ライダーごっこ」をするのに適していたからです。

遊びというより真剣勝負に近かったのが「めんこ」です。私の地域では、負ければ相手にとられるというのが当たり前で、しばしば喧嘩の元になりましたが、親も学校も特に何も言いませんでした。何十回もの対戦を経て、かつて自分が持っていた「めんこ」が手元に戻った時の喜びはひとしおでした。（野本）

S40.10.「今日もガンガン行くぞー」とほくそ笑む男の子

民俗　海坊主が出るからイヤ！という鬼ごっこ

昭和三八年高知市生まれの私が、幼い頃お気に入りだったのは、母親の手作りのぬいぐるみでした。小学校低学年までは異年齢集団で遊び、駄菓子屋でシャボン玉や銀弾鉄砲を買ったものでした。

その頃、鬼が「入れて」と言うと鬼以外の皆が「ダメ」と言い、鬼が「海に連れて行ってあげるから」と言うと「海坊主が出るから嫌」と返す鬼ごっこがありました。問答の末に鬼が皆を追い掛けるのですが、その展開がウロ覚えなので、余計気になります。調べてみると関東に同様の遊びがありました。案外、県外からの転校生に教えてもらったのかもしれません。この遊びについて高知の事例をご存知の方がいらっしゃったらお教えください。

小学校高学年になると外遊びは減りました。行きつけも駄菓子屋から貸本屋に変わり、萩尾望都など少女漫画を読み耽（ふけ）りました。中学校ではクラークなどSF小説を読み、幼年期が終わっても読書からは足を洗えませんでした。「海坊主が出るから嫌」の問答がある鬼ごっこを調べるために朝倉喬司著『遊歌遊侠　今年の牡丹はよい牡丹』を読みました。同書には「子どもたちの遊びを根底から活性化させるのも問答」とあり、追い駆けっこ前に問答をする時の、くすぐったいような感覚を思い出しました。（中村）

S40年頃　くまさんと一緒

岡豊山フォトコンテスト

「岡豊山の桜・四季」をテーマとした写真展

平成19年度優秀作品
「囲炉裏のある風景」
撮影・渡部忠男 様

平成19年度優秀作品
「さくら」
撮影・濱田零華 様

岡豊山の桜や草花をモチーフに四季の表情を切り取る一枚の写真や、公園を散策するご家族連れの楽しいひとときのスナップ。そしてお花見の時のにぎやかな語らい。そんな皆様が写された岡豊山での写真をぜひ「岡豊山フォトコンテスト」にご応募下さい。

自然に恵まれたこの岡豊山歴史公園を少しでも多くの皆様に知っていただきたいと始めましたフォトコンテストも来年は三年目を迎えますので、ぜひ皆様の撮り貯めた作品のご応募をお待ちいたしております。

優秀作品は当館内に特製額装のうえで1年間展示と、広報等にも使用させていただいております。尚、募集要項等詳細につきましては、二月から当館HPでのお知らせ、また「岡豊山フォトコンテスト」のポスターのある写真店、当館受付等で応募要項をお渡しいたしますので、よろしくお願いいたします。

平成二〇年度の応募作品受付は三月一五日～四月一三日です！

れきみん「講座」だより

講座「和菓子の世界①」

平成二〇年三月八日㈯

平成一七年度かられきみん講座が復活しました。平成一九年度は、企画展〔竹バンブー・スタイル〕と関連した講座第一回「竹と木の民俗」（六月二日）、第二回は企画展〔土佐発掘物語〕と関連して学史を取り上げた「土佐の考古学史」（一一月一〇日）、第三回「仏教文化講座②―インドの仏跡を訪ねて―」（一一月二四日）を行い、多くの方に聴講していただきました。

さて、平成二〇年三月八日（土曜日・午後二時～三時三〇分）には、本年度最後の講座を予定しています。講師には、当館の運営協議会委員でもある東京都港区赤坂の株式会社虎屋虎屋文庫研究主幹・担当部長の青木直己先生をお迎えします。講座のタイトルは「和菓子の世界①」を予定しています。

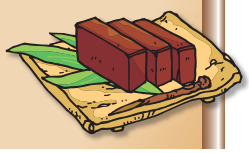
青木 直己　先生

青木先生は、立正大学大学院卒業後、立正大学助手・立正大学短期大学非常勤講師を経て株式会社虎屋の虎屋文庫に入社、現在はNHK文化センター和菓子講座講師をはじめ、学習院大学非常勤講師なども勤められています。専門は、日本近世史や食文化史です。

著書には、『図説和菓子の今昔』（淡交社）、『幕末単身赴任下級武士の食日記』（NHK出版）の他に共著で『茶の湯菓子―四季を味わう・実践入門』（淡交社）があります。

ちなみに和菓子は、日本の伝統的な菓子を指す言葉ですが、遣唐使や禅、キリシタン宣教師のもたらした食文化の大きな影響を受けています。また、和菓子は茶の湯により育成、洗練されたという面がありますが、江戸時代の中期に菓子の種類は急速に増加していきます。和菓子の世界は、どうも甘いだけではないようです。そこには我々の知らない文化史の一面があるようです。

今回の講座は、定員一〇〇名です。事前に電話などで申込をお願いします。（〇八八―八六二―二二一・高知県立歴史民俗資料館まで）



・・・新刊等のご案内・・・

「特別展３館合同企画 暗殺140年!
—時代が求めた“命”か?—
坂本龍馬・中岡慎太郎展」

平成19年度夏に特別企画された３館（高知県立歴史民俗資料館・高知県立坂本龍馬記念館・北川村立中岡慎太郎館）合同企画の図録。
A4版　102頁
売価　1,000円
送料　290円

「収蔵資料目録第12集
田辺寿男写真資料目録I
（白黒ネガフィルム編）」

民俗写真家・田辺寿男氏から寄贈された約50,000点の資料のうち白黒ネガフィルム26,578点を収録。

A4版 112頁
売価　750円　送料 290円

「高知県立歴史民俗資料館
研究紀要第15号」

土佐清水市四国霊場第38番札所金剛福寺
—木造千手観音菩薩立像修理報告
及び像内納入品概要報告—
高知県教育委員会文化財課
㈶美術院国宝修理所
泉谷　申一
高知県立歴史民俗資料館
寺石正路資料調査報告Ⅱ杜山堂日記2
野本　亮
門松小考
梅野　光興

A4版　76頁
売価　750円　　送料 290円

○郵便振替口座番号　01600−2−38806
○加入者名　高知県立歴史民俗資料館

岡豊風日（おこうふうじつ）第62号
平成一九年一二月一日
編集・発行　高知県立歴史民俗資料館
〒783−0044　南国市岡豊町八幡1099−1
TEL　088（862）2211
FAX　088（862）2110
開館時間　午前9時～午後5時
休館日　年末年始（12月27日～1月1日）、臨時休館あり
観覧料　通常期（常設展）大人（18才以上）450円・団体（20人以上）360円
無料：高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（一名）
印刷　共和印刷株式会社

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/
eメール：rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

平成20年1月～3月の催し

なつかしのおもちゃ
ー髙橋俊和さんのコレクションー

平成20年１月２日(水)～３月９日(日)

今回の企画展は、髙橋俊和さんのご協力を頂き貴重なコレクションの中から戦後、進駐軍が捨てた空き缶などを材料に再出発し発展したブリキ玩具、紙の着せ替え、街角の駄菓子屋で見かけたおもちゃ、1960年代に登場したプラスチック玩具など、昭和30～40年代の玩具を主体に展示します。また、当時のキャラクター関連のものやなつかしい道具類も若干展示を予定しています。

講座　3月8日(土)　14:00～15:30

「和菓子の世界①」

㈱虎屋 虎屋文庫 担当部長研究主幹　青木直己氏

和菓子で有名な東京都赤坂の㈱虎屋の虎屋文庫から講師をお迎えし和菓子のお話をしていただきます。
ぜひ聴講してください。

要予約　先着100名　観覧料要

展示室トーク　1月5日(土)　14:00～15:00

髙橋俊和さんと担当学芸員による展示解説です。

申込不要　観覧料要

ワクワクワーク

昔あそび　1月2日(水)　10:00～12:00
昔のあそびをしてみよう。

ふろしきを使おう　2月23日(土)　10:00～11:00
昔から使われているふろしきの使い方を学びます。
講師　谷沿正子氏

申込要　先着30名

次回企画展予告

「鰹（仮称）」
平成20年
４月12日(土)～６月８日(日)

- 江戸時代の鰹節番付で上位を占めた「土佐節」の今昔
- 「鰹の一本釣り」など、鰹漁のいろいろ
- 黒潮を回遊する鰹の生態

高知県の魚「鰹」の魅力に迫るおいしい企画展です！